The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	モンゴル帝国の海上進出までコネクション・軍事集団・海上勢力
Author(s)	向, 正樹
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47088
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【18】

氏　　名	向（むかい）　正（まさ）　樹（き）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２０７８９　号
学位授与年月日	平成 19 年３月 23 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	**モンゴル帝国の海上進出まで　コネクション・軍事集団・海上勢力**
論文審査委員	（主査） 教　授　桃木　至朗 （副査） 教　授　森安　孝夫　　助教授　青木　　敦

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、クビライ支配下のモンゴル帝国（大元ウルス／元朝）が 1270 年代の南宋征服を契機に南海（南シナ海からインド洋へと連なる海域世界）に乗り出してゆく過程を取り上げ、それを可能とした海域世界側の状況と、モンゴル帝国側の進出・支配政策の両面から検討したものである。事件や制度の単純な考証、非歴史的なネットワーク論などにとどまっていた従来の研究を越えるための検討視角として、筆者は副題にあるように、コネクション、軍事集団（軍団）、海上勢力などのコンセプトを用い、どんな個人や集団が海上貿易やモンゴルの海上進出を担っていたか、それはこの海域で活躍したムスリム（イスラーム）商人ネットワークとどんなつながりを持っていたかなどを、当時の中国と南海との貿易中心であった福建省、特に泉州を舞台として解明しようとした。

本論文は、序章・終章を含めて８章に分かれる。序章で上のような問題提起をおこなったのち、第１章ではまず、モンゴル帝国の海上進出の前提となった宋代の海上交易の活発化に着目し、アラビア・ペルシャなどの故国を離れて南海に散居した、中国側で「大食」商人と総称されたムスリム商人たちがこの発展を牽引した様子が分析される。南宋代には「大食」商人と「中国」商人との文化的差異が縮小し、両者が入りまじって中国沿岸の港市を中心とするネットワークを発達させるが、筆者はその原因を「大食」商人ネットワークのディアスポラ型の広がりから説明する。第２章では、南宋末の泉州における海上勢力の代表として知られる蒲寿庚を、当時の「大食商人」と「中国人」の融合の象徴として取り上げた。まずその貿易や軍事活動を支えた私兵集団の構成、地方行政上の位置や地域エリートとのコネクションなどを解明したうえで、すでに築かれていたモンゴル水軍を含めた各海上勢力の中で必ずしも突出していなかった蒲寿庚勢力が元にくみしたことが、なぜ南宋の死命を制したのかを、当時の東南中国沿岸の全体的動向から分析した。

第３～５章はモンゴル帝国側から見たものである。第３章では、福建統治およびそこからの海上進出を主管した。「行省」（中央政府の出先）の実態および、蒲寿庚がそこにどのように組み込まれたのかを検討した。従来の制度史研究で理解できなかった福建における行省の改廃常なき動きを、筆者は最近のモンゴル帝国史研究で重視されている軍団史の視角から整理し、「行省」が機関名というより中央から送り込まれ自分の軍団を引き連れて乗り込む将軍＝行省責任者の肩書き（〇〇行省の長官、副官等）であるため、責任者の交替や軍団そのものの配置転換などにより行省の名前（＝責任者の肩書き）が変化する、それを従来は機関の改廃が繰り返されたように誤解していた、という重要な事実を検出した。これを受けて第４章では、福建に送り込まれた江浙行省系、江西行省系の２勢力のうち前者に

属したマングタイという将軍を取り上げ、かれが一方で福建の海上勢力、他方でクビライおよび中央政権内の諸集団とどう結びつくことによって南海交易を支配したかを分析した。また第５章では、蒲寿庚および、南宋滅亡後にこれと強く結びついた江西系のソドが、1280 年代にかけて南海諸国への服属要求や出兵を進める過程を、中央政権のコントロールと関連づけながら叙述した。

第６章はモンゴル時代の泉州ムスリム社会に話題を転じ、その拠点となった清浄寺の修築の記録や、没年を刻んだムスリムの墓碑などを手がかりに、中央アジア、海域世界双方からのムスリムの流入状況の変遷を推測した。終章では以上の各章を要約した上で、モンゴル時代の後半まで含む海上世界との関わりについて展望と課題を述べた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、戦前日本の「東西交渉史」研究における金字塔とも言うべき桑原隲蔵『蒲寿庚の事蹟』以来のテーマに、近年目覚ましい躍動を見せているモンゴル帝国史研究、アジア海域史研究の両方から斬り込もうとした野心作である。中国留学の成果を活かし、中国史の基礎や中国の学界動向をきちんと押さえている点と合わせて、東洋史学分野で大阪大学がもつ特長を最大限に活かそうとした研究と位置づけられる。モンゴル時代史研究の中で、海域史は「陸のシルクロード」や中国社会の研究と比べて戦後の停滞が長く、具体的考証や、東南アジア・インド洋海域研究の新成果の吸収などが進まないままに、1990 年代には「海陸両方のネットワークを支配したモンゴル帝国」という杉山正明の見通しが一人歩きしてしまった。21 世紀に入ってようやくここに取り組む若手が輩出しつつあり、その一環として本論文のインパクトは大きい。

具体的な考証のレベルでも、宋代の「大食」商人のネットワークの再構成、福建を舞台に「行省」という「組織」の本質を明らかにした点など、本論文の貢献は少なくない。その背景には、史料や先行研究の読み込みだけでなく、ディアスポラ型ネットワーク、朝貢や異文化接触におけるエージェントの役割、軍団史、私的コネクションの諸パターンなど、歴史学の新しい切り口を示す方法・理論への旺盛な関心が見られる。

とはいえ、本論文の一部には、野心作にありがちな粗雑さも見られる。史料の扱いや本文の書き方に不適切な点が散見するほか、ムスリム・ネットワークとタミル人などのインド系や中国人の海上ネットワークとの競合・協力関係、可汗（皇帝）と従臣の紐帯のあり方、南海におけるモンゴル則の活動の実際などには、さらに考慮の余地がある。

しかし、これらの瑕疵や期待は、本論文が達成した成果と意義を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものと認定する。